

Emma の 世界

岡 本 昇

は じ め に

Emma は Jane Austen の作家活動の中で最も華やかで充実していた時期にあたる晩年の作で、著者の最大傑作とみなされる喜劇である。1814年に執筆開始1815年に完成され出版されている。時代はかなりの動乱の繰り返される頃で、1814年に Napoleon は退位、Elba 島に流され1815年に脱出するも Waterloo の戦いで敗れる。その後各地で暴動、戦後恐慌に入る。フランス革命は作者が13歳の頃から始まっていた。従姉妹の Eliza de la Feuillide の夫はフランス革命の犠牲となりギロチンで処刑されており、姉 Cassandra の婚約者 Thomas Fowle の戦死等身近な悲しい出来事も続いた。作品は時代の政治、風俗、社会と無縁であるわけではなく、当時は女性⁽¹⁾は政治に口を出さないという風潮があったことはいなめないとしても、作者は幼少から Chawton 時代まで持ち前の知性と洞察力で外的世界を鋭く見通していたにちがいない。

作品の構図は、作家の様々な素材の蓄積が抽出・精選され、見事な劇的構造にまとめられている。情景描写もそれに貢献するように意図的に作られている。この構図の中に読者が素直に入っていくことにより、その含蓄ある作者のアイロニーと知的な柔軟さ及び暖かみにふれることが可能であり、外的世界へと広がる人間性の真実を知るのである。

本論は作者がどういう主題のもと、何を対称軸ににして構想し、登場人物を巧妙に動かしてプロットを発展させているか、また当時の時代を反映している背景や情景描写を加えて *Emma* の世界を考える。

テキストは R. W. Chapman 校訂の *The Novels of Jane Austen vol.IV: Emma* (Oxford University Press, 1988) による。以下この作品からの引用は、その直後にページをカッコに入れて示す。引用の訳は阿部知二氏のものによる。

1

Emma Woodhouse, handsome, clever, and rich, with a comfortable home and happy disposition, seemed to unite some of the best blessings of existence; and had lived nearly twenty-one years in the

(1) R. W. Chapman ed. *The novels of Jane Austen vol IV: Emma* (Oxford University Press, 1988) p.510

world with very little to distress or vex her. (p.1)

(エマ・ウッドハウスは、美しく、才気にとみ、裕福であって、あたたかな家庭と明るい気質とを持ち、生活の最上の恵みのかずかずを身に集めているように見え、世に生をうけてかれこれ21年になるが、苦しみも悩みもほとんどなかったのである。)

この冒頭の言葉は主人公 Emma の原点であり、小説のすべての意味での進展上大切な伏線となる。この Emma の人間性と行動を中心にからめて物語りは展開していくのであるが、作者がねらっている「主題」については読む人にとって色々とり方がある。Arnold Kettle は “marriage” とする⁽²⁾。作者は「結婚」を題材にして自分の philosophy を表現したとするのである。Michel Foucault が「性の歴史」Ⅲ (Histoire de la sexualité Ⅲ)⁽³⁾で言うように、「結婚は私的行為から公的制度の権威の支配への進展」ととられるが、結婚という権威あるいは重大事をこの作品の主題と判断するのは、やや単線的のようにも思える。その他、Andrew H Wright は “tenderness of heart,”⁽⁴⁾ Marvin Mudrick は “self-deception,”⁽⁵⁾ Mark Schorer は “pride and perception or perception and self-deception,”⁽⁶⁾ Norman Page は “a comedy of errors,”⁽⁷⁾ Gene Koppel は “perfection,”⁽⁸⁾ R.E.Hughes は “the education of Emma Woodhouse”⁽⁹⁾ とする。それぞれの見方は一つの真理をあげていることには間違いはない。やはり私は作品を通して、人間を描き、様々な人格を認めながらも、人は過ち、大きなステージと経験を積んで目覚め、変容し、自分を実現していくものとして捉えるのである。主人公 Emma はその pride と narcissism を重なる humiliation を経て脱却、昇華し、真実なるものを発見し、立ち直り、ついに幸福をつかむのである。一つ重要なのは、その構図の格子越しに、当時の階級社会への固執・奢りと思いやり、時代感覚に即応する生き方と急変しない穏健な生き方、sensible と snobbish, intellect と sense の葛藤がまつわる図式である。そこに作品へ反映する時代の鏡と、作者の philosophy を読み取らねばならない。

登場人物については、Emma をのぞいては独立した完全なる姿には描かれていない。Knightly が “round character” に近い程度である。その他は人物相互の interplay によって姿を現す仕組みである。また各人物は典型を表し、その典型を踏み外した行動は絶対にとらない。端役であればある程その典型、特技、役割が強調される。

鈴木美津子氏は Emma を「摂政時代と流行」のテーマでとりあげる中で、主なる登場人物を「流行を追う人」と「流行に無関心な人」に類別し、前者は Harriet Smith, Jane Fairfax, Mr. El-

(2) Arnold Kettle, *An introduction to the English Novel* (Hutchinson's University Library, 1951) vol. 1, p. 90

(3) Michel Foucault *Histoire de la sexualité* Ⅲ (Editions Gallimard, 1984)

(4) Andrew H. Wright, *Jane Austen's Novels* (Chatto & Windus 1961) p. 34

(5) Marvin Mudrick, *Jane Austen, Irony as defense and discovery* (Princeton University Press, 1952) p. 181

(6) Mark Schorer, *The Humiliation of Emma Woodhouse* (Literary Review, 2, 1959) p. 547

(7) Norman Page, *The Language of Jane Austen* (Basil Blackwell 1972) p. 42

(8) Gene Koppel, *The Religious Dimension of Jane Austen's Novels*

U. M. I Books on Demand, University Microfilms International (A Bell & Howell, Michigan, 1993) p. 25

(9) R. E. Hughes, *The Education of Emma Woodhouse* (Nineteenth-Century Fiction, 16, 1961-62) p. 70

ton, Mrs. Elton, Mr. Weston, Frank Church-ill 等であり、後者は Mr. Woodhouse, Mr. Knightly, Robert Martin, Miss Bates 等とする。⁽¹⁰⁾

この作品では人物に関して色々な対照軸が巧妙にからんでいるように思える。各人物はいくつかの対照軸によって組み合わせられ、それぞれの軸を芯にして駒が生き生きと動き、劇的構造に貢献している。

まず heroine である Emma と Mr. Knightly の軸である。Knightly が Emma に愛の告白をするまで、読者には二人が結婚相手になろうとは、当初からは到底思えない存在である。Emma は甘やかされて育ち、明るさ、聡明さ、積極性の面でも、健康面や美しさでも、身分の面でも不足のない人物として登場してくる。“I am going to take a heroine whom no one but myself will much like.” と作家の言う通りまだ未完成で、自信過剰でもある。⁽¹¹⁾ 一方、Knightly は16、7歳も年上で人生経験もあり、心こまやかで公正な人物である。Emma はいくつかの blunder を冒していき、Knightly が率直に道理に正して彼女をたしなめ、また Emma も彼からだけはよく忠告を受け入れ変容していく。二人のからみの中で起伏を経て筋は進展するのであるが、両者の性格は対照的であり、補完的である。

次に Miss Bates と Mr. Woodhouse の軸である。Miss Bates は饒舌で、単調なおしゃべりに読者も閉口するが、無邪気で憎めない。Mr. Woodhouse は資産のある家父長だが慎重で変化を嫌う。固定観念が強く、自分を一般化し他人にも当てはめようとする、既に老化現象が見える人物である。両者とも脇役ながらかなりの場面で Emma の引き立て役として貢献するが、好人物であり、喜劇的人物としての共通項がある。

この善人の両者に対照的に存在するのが Mrs. Elton である。口数も多いが Miss Bates とは違って他人へのおもいやりもなく、humour もない。彼女は最も俗悪な人物として Highbury に乱入してくる。Emma にとって最も嫌悪すべき人物である。当初 harriet の結婚相手として Emma から推薦されていた Mr. Elton が、出し抜けに Emma に求婚し厳しく拒絶された後、この Mrs. Elton (Augusta Hawkins) と結婚する。 . . . , such she (i. e. Mrs. Elton) appeared whenever they met again, —self-important, presuming, familiar, ignorant, and ill-bred. She had a little beauty and a little accomplishment, but so little judgment that she thought herself coming with superior knowledge of the world, to enliven and improve a country neighbourhood; (p.281)

Emma から心情的に最も遠くにいるこのうとましい Mrs. Elton に対して、Emma から最も近くにいる女性は、Mr. Elton との夢破れた Harriet Smith である。彼女は従順で Emma の感化を受け何度か Emma の match-making の犠牲になるが、皮肉にも最後には Emma から退けるように忠告された Martin と結婚して Emma もほっとするのである。

(10) 鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』(成美堂、1995) p. 214

(11) J. E. Austen-Leigh, *A Memoir of Jane Austen* (London: Richard Bentley, 1870) p. 204

Marghanita Laski, *Jane Austen and her world* (New York: The Viking Press, 1969) p. 96

この身近かな存在の Harriet に対しては、美化して描かれている、優雅ではあるが弱々しい Jane Fairfax がいる。見かけ上はおとなしく、冷静で、自分を主張しない女性であるが、過去に何か隠されていることがあるのではないかと思わせる謎の人物である。小説の終わり近く、Frank Churchill と以前から秘密に婚約していた事が読者に知らされ衝撃を与える。

Knightly と対照的な存在となるのがその Frank Churchill である。彼は要領のよい軽薄な才子であるが、Highbury に初登場の折には容姿秀麗な好青年として Emma の注目をひく。“・・・ he was a very good looking young man; height, air, address, all were unexceptionable, and his countenance had a great deal of the spirit and liveliness of his father's; he looked quick and sensible.・・・” (p.190) しかし筋の発展とともに彼は口上手で (p.240, p.242参照) Emma に対する軽薄な振舞い、Fairfax への疑惑の仕打ち等があり Knightly からも嫌悪されるが、Mrs. Weston の義理の息子としての擁護から作者は許容していると見なされる。(Frank の長い弁解の手紙が挿入されている。p.436)

この Frank と対照できる人物として、Harriet と結婚する朴訥な農夫の Robert Martin が考えられるが、彼は Minor な人物で十分描かれていない。

総じて男性はすべて女性との対照軸の遠い側にいる。男性は女性のいない場所では語らない。

これらの人物の特徴をよく表しているのは、それぞれの人物の言葉であり、その人物たちをうまく動かしているのは作品の語りの技術である。これについては、次の機会の続編で述べたい。

2

この対照的な関係に配置される人物たちのからみの中で、しばしば humour も irony も滲み出て読者を引き込み、退屈させない。

いくつかの humour が仄めく箇所をあげてみる。

まず、Miss Bates の饒舌に、Mrs.Elton のでしゃばりも影がかすむ場面である。

Miss Bates and Miss Fairfax, escorted by the two gentlemen, walked into the room; and Mrs. Elton seemed to think it as much her duty as Mrs. Weston's to receive them. Her gestures and movements might be understood by any one who looked on like Emma, but her words, every body's words, were soon lost under the incessant flow of Miss Bates, who came in talking, and had not finished her speech under many minutes after her being admitted into the circle at the fire. As the door opened she was heard, "So very obliging of you!・・・" (p.322)

続く例は Harriet が Mr. Elton への想いを断ち切るために、彼女が密かに宝物にしていた記念の court plaster (絆創膏) の使い残しと古い鉛筆の切れはしを燃やそうとする場面である。humour と同時に哀れさが残る。

“・・・ It was very wrong of me, you know, to keep any remembrances, after he was married. I

knew it was—but had not resolution enough to part with them.”

“But, Harriet, is it necessary to burn the court plaister?—I have not a word to say for the bit of old pencil, but the court plaister might be useful.”

“I shall be happier to burn it,” replied Harriet. “It has a disagreeable look to me. I must get rid of every thing.—There it goes, and there is an end, thank Heaven! of Mr. Elton.” (p.340)

また、気の利いた話題のつもりで、Mr. Weston が conundrum を仕掛け、“perfection” とは何かと問いかけ、それは M & A だと。つまり Emma のことということになる。この Box Hill での場面もその例である。(p.371)

Jane Fairfax と Frank の結婚も、Emma と Knightly の結婚もまともに、Emma が Jane に会いに行く所で、Mrs. Elton のでしゃばりの発言や Miss Bates の饒舌な応答の混乱ぶりもそうである。(pp.453-456)

Emma と Knightly の関係が実を結んだところで、Knightly が彼女に13歳の頃から思いをよせていたとの発言に対し、Emma は「Mrs. Weston の赤ちゃん (Anna Weston) に対してもよろしく。ただこの子が13歳になった時、恋心を寄せてもらっては困りますが。」その後しばらく二人の遠慮のない昔話が続く場面もほのかな、甘い humour がただよう。(pp.462-463)

irony のにじむ例としていくつかあげて見ると、まず、Emma が Mr. Woodhouse の結婚反対論にたいする皮肉を彼に述べる場面である。“・・・ a young lady (i. e. Mrs. Elton) — a bride— I ought to have paid my respects to her if possible. It was being very deficient.”これに対し Emma は、“But, my dear papa, you are no friend to matrimony; and therefore why should you be so anxious to pay your respects to a bride? It ought to be no recommendation to you. It is encouraging people to marry if you make so much of them.” (p.280)

Emma と Knightly の結婚へと筋が発展するにつれ、二人の人間観も変わってくる。Knightly があれ程「甘やかす育て方」に批判的だったのが、Emma と結ばれることになると、そのような Weston 夫人の養育法を容認する。(p.461)

また、Emma が Knightly から、Harriet と Martin が結ばれることを聞き、もともとこの組み合わせに反対していた Emma ではあるが、内心ではとても安堵し、喜んでいるにもかかわらず、すぐには顔に表さず Knightly も気遣っている。やっと Emma の本意がわかり、お互い以前の自分たちから変容していることを認め合う。(pp.473-474) 反発せず、お互いに認め合うようになり、二人の関係も変容している。またお互い、以前の Jane Fairfax への対応についても違っていることを冷やかしている。(p.478) 明るい irony である。

この作品の、Emma を中心とする初めの部分と結末の部分と比較・対照すれば、大いなる irony があり、それも幸せに導く明るい irony である。この作品の冒頭の文章にある通り、「美しく (handsome), 利発で (clever), 裕福な (rich),」結婚を必要としないとされた Emma が、結婚の組み合わせに加担していく中で、挫折しながら目覚めていき、深刻な自己認識に至り、終

局で自らが幸せな結婚にたどりつくのは、大いなる irony であろう。

自然描写は劇の背景程度にとどめられ、それは作品の意図、筋の展開状況に沿って構成された描写である。所謂 essentials のみを残し、装飾的要素は可能なかぎり省かれている。主人公 Emma の心情を写す、あるいはその心の動きを予言するように展開する。

次の場面は、Emma が Knightly からついに愛の告白を受ける前の prelude となる描写で、この作品では稀に長いものとなっている。

The weather continued much the same all the following morning; and the same loneliness, and the same melancholy, seemed to reign at Hartfield—but in the afternoon it cleared; the wind changed into a softer quarter; the clouds were carried off; the sun appeared; it was summer again. With all the eagerness which such a transition gives, Emma resolved to be out of doors as soon as possible. Never had the exquisite sight, smell, sensation of nature, tranquil, warm, and brilliant after a storm, been more attractive to her. (p.424)

(翌朝も相変わらずの天候だった。同じようなさびしさと同じような憂鬱とがハートフィールドを領しているようであった。——だが午後になると晴れてきた。風の向きが変わって穏やかになり、雲は吹きはらわれ、陽があらわれ、ふたたび夏に立ちもどった。この急変に誘われて心もそぞろに、エマはできるだけ早く戸外に出ようとした、嵐のあとの静謐で暖かだがやかしい自然の美しい眺め、香り、感覚ほど彼女にとって魅力のあるものはなかった。)

この描写はいかにも Emma の重なる挫折と淋しさ、憂鬱の心境、そしてその後の明るい兆し、希望の開ける未来を予測させるような見事な表現である。この後 Knightly の告白が続き、Emma の身辺の状況はすべて陽転していくのである。

語りの視点はほぼ Emma の視点で統一される。部分的には作者の omniscient な視点とか他の人物の視点が入ってくることもあるが、それもほんの僅かと言える。作者の視点といっても Emma との二重の視点となる場合が多い。それも自由間接話法の場合で所謂 “dual voice”⁽¹²⁾ と言われるものが多い。

視点は Emma であっても、ナレーター的位置は様々で、云わばカメラの位置のように、ナレーター的位置と被写体であるそれぞれの人物との距離は遠近があって、それによって重要度の異なる大小の人物が暴かれていく。Knightly は別として、男性よりも女性の方に焦点があたる方が多い。

次の例は視点によって、humour も irony も生まれる例である。Emma は Knightly と固い(結婚の)約束をかわして家に帰ったとき、何も知らぬ Mr. Woodhouse を描写する場面である。読者は climax への期待感にはずむ。

Poor Mr. Woodhouse little suspected what was plotting against him in the breast of that man whom

(12) Roy Pascal, *The Dual Voice: Free indirect speech and its functions in the nineteenth-century European novel* (Manchester University Press, 1977)

he was so cordially welcoming, and so anxiously hoping might not have taken cold from his ride—Could he have seen the heart, he would have cared very little for the lungs; . . . (p.434)

(ウッドハウス氏は気の毒にも、自分が心から歓迎し、馬を飛ばせたため風邪をひかなければよかったがと、案じてやっている男(ナイトリー)の胸の中で、自分にたいしてどんなことがたくまれているか、露ほども測り知ることができなかった。)

Mr. Woodhouseは身内の結婚については常に批判的であり、特にEmmaの結婚の話があれば目をむいて反対するであろうが、この場面は完全にEmmaの視点から見られており、彼は自分に降りかかる変化を全然気づいていないのである。

このような場面は度々あり、Emmaの側にいる読者にはわかっているが、他の人物にはわからない状況から、humourやironyが生まれるケースがある。

読者はEmmaがいる位置から状況を知り、Emmaと一体化して感情を動かし判断もする。明らかにEmmaの視点で進めることにより、訴える効果が大きいと思える場面は前半ではp.110, p.151, p.164, p.165, p.172, p.173, p.184, p.191,であろう。しかし、各章の初めの部分では全知に近い説明が入るところもある。後半はほぼEmmaの視点で統一されるが、特に、pp.257-263, pp.367-376, pp.434-443が目立って効果的である。さらにVol. III 14章(全50章)では、完璧にEmmaの視点で展開し、Knightlyと結ばれた後の父WoodhouseのことやHarrietに対する心情が長く語られ、サスペンス気味に読者の興味をそそる。EmmaにはそこでFrankからの長い釈明の手紙文が入りEmmaにとっては彼のことについては落着し、終局に向かって行く。Emmaの視点で筋の整理がついていくのである。

3

Jane Austenが時代を超越した作家であるとはよく云われたことであつたが近年多くの批評家による研究も出ているように、彼女はその鋭い洞察力で時代の背景、社会状況の実態を把握し、自分の見解も含めて作品に盛り込むことが多々あるように考えられる。⁽¹³⁾

この作品の全編を通じて、時代的背景をのぞき見る箇所がいくつか見られる。先ず当時の奴隷制度についての言及が見られる。Jane Fairfaxが、他人の思いもわきまえず、自分の知り合い

(13) Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas*. (Oxford: Clarendon Press, 1975)

Marilyn Butler, "History, Politics and Religion." in *The Jane Austen Handbook*, ed. J. David Grey. (London: Athlone Press, 1986)

Claudia L Johnson, *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. (Chicago: University of Chicago Press, 1988.)

Julia Prewitt Brown, *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel* (New York: Macmillan Publishing Company 1985)

Edward W. Said, *Culture and Imperialism*. New York: Alfred A. Knopf, 1993.

鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』成美堂、1995

三馬志伸「Propriety and Hierarchy in Jane Austen's Novels」玉川大学編『芸文研究』第73号、1997
その他。

の上流を誇示し、家庭教師の職を斡旋、おしつけようとする Mrs.Elton に対し “・・・I am not at all afraid of being long unemployed. There are places in town, offices, where inquiry would soon produce something—Offices for the sale—not quite of human flesh—but of human intellect.” これに対し Mrs. Elton は、“Oh! my dear, human flesh! You quite shock me; if you mean a fling at the slave-trade, I assure you Mr. Suckling was always rather a friend to the abolition.” (p.300) Jane はそれに答えて、「奴隷売買のことなど考えてはいませんでした。家庭教師商売のことだけですわ、私が考えていたのは。それを行う人たちの罪深さについてはたしかに大きな相違はありましようが、でも犠牲者の苦しみの深さという点では、どちらにあるのか私には分かりません。」と述べる。

Mrs. Elton の言葉の中に義兄の Suckling を弁護しているところがあるが、彼が近くに住んでいる Bristol は奴隷貿易で栄えたところであり、作者は奴隷制度をよく熟知しており、Mrs. Elton の話題にからめたに違いない。

次にこの作品には時代の階級意識が現れるところが多い。次の例は Emma が Harriet に Martin との交際をいましめる場面である。

“A young farmer, whether on horseback or on foot, is the very last sort of person to raise my curiosity. The yeomanry are precisely the order of people with whom I feel I can have nothing to do. . . .” (p.29) 自作農なんて自分には関係のない階級だと云っているのである。

また Emma が唐突に Elton に言い寄られた時、3万ポンドの相続人の彼女が、しがない牧師に求婚されたことに、ひどく侮辱とショックを受けるのである。・・・he must know that in fortune and consequence she was greatly his superior. He must know that the Woodhouses had been settled for several generations at Hartfield, the younger branch of a very ancient family.—and that the Eltons were nobody. (p.136)

更に Emma は友人の資格として、Birth, Abilities, Education を重要視すると言う。(p.421)

しかしながら Emma は階級意識を持って下位のものを軽蔑しているわけではない。心からの Charity の行為を行う場面もある。Harriet とともに貧しい農夫を食物を持って訪問し、お見舞いと助言をするのである。(pp.86-87) 作家 Austen 自身の charity の行為については、Marilyn Butler⁽¹⁴⁾ も言及している。

Mrs. Elton については、相手を見下ろすような階級意識の持ち主に設定されている。彼女は Jane Fairfax に「一流社会の、地位の高い、家柄の良い、身分の高い、申し分のない」とする知人の家の家庭教師を強引に押し付けようとする。(p.359) Mrs. Elton は新時代に富をなした商売に縁の深い家の出で、地主階級の外部の側に立ち、服装、作法、なれなれしい言葉等で、Emma や Knightly の伝統的社会とあいられない。しかし Miss Bates のように金のない人の地位の降下と惨めさと、Cole 家のような成り金者の上昇は既に時代の変化を告げている。

この作品は当時の女性の地位の向上と自立についても示唆するところが多い。その時代の女

(14) Marilyn Butler, *History, Politics and Religion*. p. 201

性の社会的政治的解放と地位の確保以上に、Emma の生き方と変容を通じて、女性が一人の人間として他人をあやまりなく見る目を養い、他人を傷つけたり、迷惑をかけることを戒め、真実をつかむという基本が大切であるとする。それが外部の世界、時代の流れをとりこむ出発点としているように思える。

結 び

全体の構想は、Emma の成人までの教育、人に負けない能力、健康、家の地盤を背景にした自信と信条、行動力、特に結婚への match-making にかかわる関心の強さのなか、一つ一つ挫折を重ね、周辺でもいくつかの結婚が実現していく状況のなかで、Emma の憔悴、失望、目覚めと自己実現への経過の後、紆余曲折を経て Emma と Knightly が結婚する喜劇の形をとる。

人間の真理を描くように、素材は凝縮され、人物も対照的な典型的な特徴のあるものをそろえる。筋の展開は「結婚」という話題で始まり「結婚」で終わる。うったえる主要なところは「会話」を主にして進められていく。舞台は制限され、関係のあるすべての地域を入れても、16マイル四方に入る。全体の筋の経過は、秋から次の秋までまでのまる一年の経過の内に収まる。これらはすべて演劇的手法である。

劇の進行に関係のないものは削られているようだが、「時代」ははっきり顔を出している。まず諸所に見られる当時の階級意識である。当時階級の基盤が出生から次第に経済力に移行している時代である。Bates 家の下降、Cole 家の上昇がそれを物語る。財産 3 万ポンド（今日の約 6 百万ドルにあたる。）の Emma は 1 万ポンドの Augusta Hawkins (Mrs. Elton) よりも優位に立つ。“ . . . and it is poverty only which makes celibacy contemptible to a generous public! A single woman, with a very narrow income, must be a ridiculous, disagreeable, old maid! . . . ” (p.85) と Emma が経済力の重要さを Harriet に仄めかす。

職業に関しては、生計を稼ぐ必要のあるジェントルマンの息子たちにとっては限られたもので、the church, the army, the navy, the law, the medicine の分野の順番であったと言われる⁽¹⁵⁾。しかし Austen が軍人ややや優位に見ていたのは、Jane の父 Fairfax 中尉や Mr. Weston (元大尉) に対する扱いを見ても判る。ジェントリー階級の女性には職業の選択はせいぜい家庭教師ぐらいしかなく、財産のない女性にとっては結婚は貧困をまぬがれる一番望ましい道であった。Emma の発言には、女性の行動の限界も伺われ (p.122)、男女の差別感を感じる。

当時の風俗、流行についても、「店の規模においても、流行においても先頭に立つ」(p.178) 呉服店 Ford やパルシェーランド型馬車に関わる話題で伝えられ、それに流される Mrs. Elton 等や、冷静な Emma や Knightly を描いている。

Austen はこのような当時を支配した時代の流れ、社会感覚、風俗事情を直視しながら、否定

(15) Juliet McMaster, “Class” in Edward Copeland and Juliet McMaster, ed., *The Cambridge Companion to Jane Austen* (Cambridge University Press, 1997) p. 121.

できない真理、人間性を描いて見せる。Emmaの世界は、やはりいつの時代の読者にも納得させる人間の心理の動き、鋭い観察眼、欲望の衝突と愚行、知的に躍動する判断力・批判、健康なhumour、鋭敏なironyが、登場人物のinterplayによって緻密に構築されたものと言える。

主なる参考文献

- Brown, Julia Prewitt, *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel*. New York: Macmillan Publishing Company, 1985 (松村昌家訳『19世紀イギリスの小説と社会事情』英宝社、1987)
- Butler, Marilyn, *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Clarendon Press, 1975
- . “History, Politics and Religion.” in *The Jane Austen Handbook*, ed. J. David Grey. London: Athlone Press, 1986
- Copeland, Edward and McMaster, Juliet ed., *The Cambridge Companion to Jane Austen*. Cambridge University Press 1952
- Foucault, Michel, *Histoire de la sexualité*. III Editions Gallimard, 1984
- Grey, J. David ed., *The Jane Austen Handbook* London: The Athlone Press, 1986
- Johnson, Claudia L, *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. Chicago: University of Chicago Press, 1988
- Kettle, Arnold, *An Introduction to the English Novel*. vol. 1. London: Hutchinson's University Library, 1951
- Koppel, Gene, *The Religious Dimension of Jane Austen's Novels*. U. M. I. Books on Demand, University Microfilms International, Michigan: A Bell & Howell, 1993
- Laski, Marghanita, *Jane Austen and her world*. New York: the Viking Press 1969
- Littlewood, Ian ed., *Jane Austen Critical Assessments* vol. I~IV, Helm Information Ltd., 1998
- Mudrick, Marvin, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery*. Princeton: Princeton University Press, 1952
- Page, Norman, *The Language of Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell 1972
- Pascal, Roy, *The Dual Voice: Free indirect speech and its functioning in the nineteenth-century European novel*. Manchester University Press, 1977
- Schorer, Mark, “The Humiliation of Emma Woodhouse”, in *Jane Austen: A Collection of Critical Essays*, ed. Ian Watt, Prentice Hall, 1963
- Southam, B. C. ed., *Jane Austen: The Critical Heritage*, vol. 1, London and New York: Routledge, 1968
- Wright, Andrew H., *Jane Austen's Novels—a Study in Structure*. London: Chatto and Windus, 1961
- 阿部知二訳『世界の文学6 オースティン「エマ」』中央公論社 1965
- 『英国小説研究』同人『英国小説研究』第13冊 英潮社 1997
- 石塚虎雄『ジェイン・オースティン研究』興文社 1969
- 柴田徹士他4名『英国小説研究』第一冊 文進堂 1954
- 鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』成美堂 1995
- 津田塾大学「文学研究」同人『ジェイン・オースティン——小説の研究』荒竹出版 1981
- 直野裕子「Emmaの喜劇人物 Mr.Woodhouse」『甲南女子大学研究紀要創立10周年記念号』1975
- 宮崎孝一『オースティン文学の妙味』鳳書房 1999
- 三馬志伸「Propriety and Hierarchy in Jane Austen」『芸文研究』第73号 1997
- 樋口欣三『ジェイン・オースティンの文学』英宝社 1984